
水の、ひとしずく

文樹妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水の、ひとしずく

【Nコード】

N1069D

【作者名】

文樹妃

【あらすじ】

生まれたばかりの水の、ひとしずく。彼の目からつづる、世界と人間。流れ、巡る水の思いを描いた作品です。

（前書き）

「水」をテーマにした企画小説参加作品です。
「水小説」（「」なしで）で検索すると、他の参加者の方々の作品も読めますので、どうぞご覧ください。

僕がいつ、どこで生まれたのかはわからない。

ただ、気がついたら、漂っていた。

漂いながら見渡すと、周りには、僕と同じ姿かたちをした、たくさん仲間がいた。

僕と同じように何も言わずに漂っているものもいれば、何か話しかけてくるものもいた。

そうして漂っているうちに、たくさんの友達ができた。

僕より先に生まれたいらしいその友達は、色々なことを教えてくれた。

僕が漂っているその場所は、川、という名前らしい。

ある友達は、山、という場所から溶けて流れてきたと言っていた。そしてもう一人は、空、という上のほうの世界から、落ちてきたと言っていた。

どこか暗い場所から出てきた、という言葉もあった。

それでもみんな、一番最初にどこから来たのか、という質問には答えてくれなかった。

そう、それは誰も知らないことらしい。

気がつけば、そこにいた、という記憶。

そうならば、僕はこの川にいたのが最初の記憶、なのだろう。

漂ううちに、周りの景色は段々変わっていく。

僕はみんなに教えてもらい、色々なものの名前を知った。

まず、川のそばに並んでいる緑のものは木。

そして上に見えるのは、空、白いふわふわしているのは、雲。

僕は雲を見ながら、なんだか僕らと似ている、と思ったりした。

空は僕らに色々な表情を見せてくれた。
青く澄み切っていたり、まぶしい光にあふれていたり、燃えるように真っ赤だったり。

それはとても綺麗だったけれど、僕はいつもやってくる、夜、という時間が少し怖かった。

真っ暗で、何も見えない。漂う自分の姿もわからない。それがどうにも不安だった。

でも仲間に教えてもらって上を見ると、少し、遠くに白いきらきらしたものが光っていた。まあるく、黄色いものも。

星、と月、というらしいその光に、僕は少し慰められた。

初めて、雨、というものを知った時には驚いた。

だって、空からたくさん仲間が降ってくるんだもの。

降ってきた、たくさん、僕と同じ形をした仲間は、やっぱり最初は不思議そうに、やがては僕と同じように、ゆっくり、ゆっくりと漂う日々を過ごすようになるのだった。

時々空を飛んでいる、鳥、というものも僕らを楽しませてくれる。大きいものや小さいもの、色々な動きで飛び回り、時には僕らの間近までやってくる。

それから小さな虫、彼らもとっても面白い。

けどすぐにいなくなってしまうから、少しさびしくなる。

昔はこの川に、魚、というものがたくさんいたらしいけど、今は残念ながら見ることはできない。そう教えてくれたおじいさんは、なんだか悲しそうな顔をしていた。

でも僕には、見たことのないものことはあまり気にならなかった。
た。

僕が一番気になったものは、時々見える、不思議なものたち。

小さかったり、大きかったり、それは様々な姿かたちをしていて、僕らのそばにやってきたり、遠くに見えたり、するものだ。

人間、という名前だと、おじいさんは教えてくれた。

そうしてゆっくり、ゆっくりと流れながら、段々と周りに見えるものは変わっていった。

遠くに少しだけ見えていた建物、という名のものたちが、どんどん増えていき、代わりに木は少なくなっていくた。

建物は段々大きく、高くなっていき、それと同時に、人間もたくさん見えるようになった。

橋、というものが僕らの上をまたぎ、そこにはとてもすばしく動く、いろんな色のものたちが行きかいました。

自動車、というその中から、人間は出てきたり、消えていったりもする。

おじいさんが言うには、建物の中に、人間は住んでいるということだった。

僕はおじいさんに、人間のことを色々聞いた。

おじいさんはなぜだか色々なことを知っていて、僕に教えてくれただけれど、僕がいつも聞く質問には、どこか悲しげな表情を浮かべて、答えてくれないのだった。

『おじいさんは、どうしてそんなに色々知っているの？』

『僕たちはどこから生まれたの？』

『そして、どこへ行くの？』

困ったように微笑むおじいさんを見て、僕はいつしか質問するのをあきらめた。

それでも頭の中には、いつもその疑問がまわっていた。

建物と人間が増えていつて、しばらくすると、少しずつ、川の様子が変わってきたことに気づいた。

幅が段々と狭く、細くなった。

そして、いつの間にかできた、暗い穴に、吸い込まれるように消えていく仲間たちと、また別の穴からは、流れてくる仲間たちもいた。

流れてくる仲間たちは、どこか疲れたような顔をしていて、話しかけても、答えてくれない。そして川の中は、なんとなく、静かで沈んだ空気が満ちだしているのだった。

それでも僕らは漂う。

流れ、揺れながら、行き先も知らない旅を続ける。

そして僕もいつしか、あまり言葉を話さなくなっていた。

そんな毎日の中で、僕はいつしか人間を観察するようになっていた。

だって、それが一番たくさんいて、いつでも見ることができたから。

そして人間たちは、建物と違って、いつも動き、何かをしていたから。

黒い、似たような服を着ている人間たちは、大きな建物に出たり入ったり。

仕事、ということをしているらしい。

それより少し背の低い、それでも同じような衣服で揃えた人間たちは、学校、というところに通っているらしい。

どちらも飽きもせず、毎日、毎日繰り返し返している。

僕らがこうして漂うのと同じような行動なのだろうか。

僕らがいる川の周りには、走っている人や、座っている人、そし

て犬、というやたらに走り回るものを連れてくる人など、たくさんの人間たちが集まる。

その中でも、僕が好きなのは、小さくて、可愛らしい人間。

どうやら、子供、というらしい。

嬉しそうに笑って、はしゃいで、歩いたり、走ったり、なんだかとても楽しそうで、そんな彼らを見てみると、僕までが少し楽しくなった。

けれど、そんな子供を抜きにすると、川の近くに居るのは、どこか沈んだ顔をした人が多かった。

疲れた顔、さびしそうな顔、どこか、みんなが遠い目をして、僕らが漂う川を眺めているようだった。

一体、どうしてなんだろう。

彼らは何を思っているんだろう。

それは、あの暗い穴から出てきた、仲間たちのような顔だった。

僕は一度だけ聞いたことがあった。

『どうしてそんな顔をしているの？』

『あの穴の向こうには、何があるの？』

けれど、穴から出てきた仲間は、僕を見つめて、こう言った。

『知らないほうがいいこともあるんだよ』

その言葉の意味はわからなかったけれど、僕はなんだかそれが人間と関係しているような気がしていた。

そんなある日のことだった。

また真っ暗な夜が来て、僕にとってはいやなことに、月も星も見

えない、どんよりとした時間の中、ある橋の下まで僕は流れきていた。

橋の上に、こちらを見ている人間がいるな、そう思った瞬間。その人間は、川に向かって、飛び降りたのだった。

突然の衝撃を与えられて、僕は驚き、飛び跳ねた。

その僕らを押し込みながら、沈んでいくその人間。

なんだか怖くて、不安で、僕はその背中を押し上げた。

僕の力なんかでは、びくともしなかつただけけれど。

静かな川に巻き上がった飛沫の中で、口々に驚きの言葉を叫ぶ仲間たち。

その中で、一人だけ、冷たい声で言ったものがいた。

『僕らの未来を絶つておいて、よくもこんなことができるものだ』

その言葉の意味がわからず呆然とした僕の隣で、おじいさんは悲しげな顔をして、黙っていた。

沈みかけた人間は、結局たくさん集まってきた人間たちによって救われたようだった。

僕はなんとなくほっとしたけれど、心の隅に暗い影のようなものが一点、落とされたような気がするのだった。

たくさん、たくさん人間たち。

忙しそうで、でも悲しそうで、不思議な生き物。

もしかして彼らも、自分たちがどこから来たのか、どこへ行くのか、わからないのだろうか。

僕の心に生まれたそんな疑問。

それは、僕の中で、人間という奇妙な生き物を、近く感じさせる気がした。

流れ、流れて、そんな疑問も忘れかけていた頃、突然事態は大きな変局を告げた。

ある大雨の日、あまりに大量に流れ込んだ仲間たちに押されて、僕はあの暗い穴へ流されてしまったのだ。

ゴウ、ゴウ、とすさまじい音と勢いにのまれて、僕は普段の何倍もの速さで穴の中を駆け抜けた。

そしてあまりのスピードに疲れ果て、何がなんだかわからないうちに、ある場所へと辿り着いた。

人間たちが集まった、建物の中。何かの薬をたくさんたくさん入れられて、いろんなところを通り抜けて、僕はまた流れ出す。

そして気がついた頃には、またどこかの暗い場所を流れていた。

流れのゆるやかさに落ち着いた僕だったが、今度は一体そこがどこなのか気がなりだした。

周りにいた仲間も、僕と同じように不思議そうな顔で、どこにどうなっかってやってきたのかわかっていないようだった。

しばらく時間が経った頃、僕はまた少し速くなった流れに巻かれながら、突然明るい場所に出た。

僕がいたのは、何か透明の物の中のようなだった。

あわてて辺りを見回すと、そこには今まで見たことがない風景が広がっていた。

何か色とりどりの、いろんな形をしたものがいっぱい並んでいて、それはとても窮屈で、でも面白い風景だった。

何より不思議だったのは、上のほうにいつも見えていた、空がなかったこと。

そして僕がいる透明の物の中も、同じようにとても窮屈で、狭かった。

ぎゅうぎゅうに押し込まれた僕らが、ひしめき、揺れて、そして落ち着いた時。

僕の目の前にいたのは　あの、いつも遠くから見ていた、人間だったのだ。

人間をこんなに近くで見るのは初めてで、あまりに突然のことに、なんだかとても不思議で、驚きと興奮でいっぱいの中で、僕はその人間を見つめた。

その人間は、なんだかとても疲れたような、悲しいような顔をしていた。

ああ、まただ　。
なぜ、人間は、いつもこんな顔をしているんだろう。

僕がとても近くで見えるそんな顔に、引き込まれるように見つめていた、その時だった。

その人間が、僕のいる透明の物を持ち上げ、傾けて、僕ら仲間を全部、飲み込んでしまったのだ　。

ぼつかりとあいた、長い長い、人間の穴の中に、僕らはあつという間に落ちて、流されていった。

そうして、ふと気づいた時、僕は今までのように、流れていなかった。

空を見上げて、漂ってもいなかった。

なんだか暗くて、不思議な、静かな場所にただいるのだった。

そこには僕の仲間がいるのかもわからない。僕自身の姿もよくわからない。

ただ、そこにある、ということだけがわかった。

そして、流れ込んできたのは、何か怒涛のようなものだった。

楽しい、嬉しい、面白い、悔しい、切ない、苦しい、さびしい、

悲しい……色々な、色々な気持ちが、たくさん、たくさん、僕の中に流れ込んできた。

あふれかえる激流のような、そんな言葉と思いは、僕の体を駆け抜けていった。

そして、流れ、駆け抜け、押し寄せるようなそれは、僕の心をいっぱいにして、埋め尽くし、あふれていった。

洪水のような不思議な感覚は、僕にひとつのことを教えてくれた。

唐突に頭の中にひらめくように、わかったこと　それは、人間の感情なのだ、ということ。

ただ、漂い、流れていた僕とは比べ物にならないほどのたくさんの感情。

川の前でいつも人間が見せていたあんな顔には、こんなにたくさんのものが詰まっていたのか。

驚きながら、その感情を人間と共有していた、僕は、その怒涛のような流れの奥底に、一つの思いを見つけた。

それは、驚くべきことに、僕がいつも持っていた疑問と同じものだったのだ。

『僕は一体どこから来たの?』

『なぜ、こうしているの?』

そして、

『僕らは一体、どこへ行くの?』

ああ、やっぱり、同じだった。

僕はなぜか嬉しい気分で、納得していた。

人間も、僕も、同じなのだ。

漂い、流れていく時間。

いつも繰り返している、こと。

なぜそうしているのか、何のためにそうしているのか。

僕にも、人間にもわからないのだ。

そう、僕が深いところで人間と繋がったような気がした、その時だった。

僕はまたどこかからやってきた熱い、不思議な流れに乗って、突然、外に飛び出したのだ。

流れ落ちた瞬間、人間の大きな瞳が見えた。

悲しげな、苦しげな、その瞳。

僕はそこから飛び出して、流れて、落ちて、そして

全身が何か、形のない、やわらかいところへ溶け出したような気がした。

自分の輪郭が崩れたような、それでも不思議と心地いいような、懐かしいような、ふんわりとした感覚に僕はいつの間にか包まれていった。

人間も、色とりどりのものたちも、遠ざかっていく。

どこを、どう通ったのか、僕はただ、ふうわり、ふうわりと、上っていくのを感じていた。

そして、随分とそんな感覚に慣れた頃、僕は自分の真下に広がる世界を見た。

遙か下に、いつも見ていた建物や木が、そして山や川が見える。

人間たちは、遠すぎて見えないけれど、それでもきつといつものように、動いているんだろう。

嘆き、悲しみ、流れながらも。

透明な、姿かたちになつた僕は、気づいた。

そうか、ここが空なんだと。

いつも自分が見上げていたところに、僕はいるんだ。

ふと気がつけば、周りには自分と同じように、透明な仲間たちがたくさん浮かんでいた。

同じように空の中で漂いながら、僕は下の世界を眺めた。

どこか疲れたような、さびしいような色をまとっているようにも見える世界。

僕は、ずっと以前、誰かが言った、あの言葉を思い出していた。

僕らの未来を絶つたのは人間だと。

その意味はよくわからないけれど、人間たちのいる建物から届く、色々な、不快な匂いや、煙、そして奇妙な天気には、いつしか気がつくようになっていた。

周りで浮かぶ仲間たちも、少し苦しそうな、そんな表情をしている。

それでも、僕は人間を嫌いにはなれなかった。

狭く、息苦しいあの空間で、見たあの人間の瞳が忘れられなかったから、かもしれない。

川の近くで人間が見せる、悲しい表情の意味を知ったから、かもしれない。

そして、ただ純粋な、美しい笑顔を見せる子供たちを知っていたから、かもしれない。

浮かんで暮らす、空の中は、それでも下から見た時より何倍も美しかった。

夕日が染める、優しい、空の中から見下ろす時。

世界はやっぱり、綺麗だった。

そんなある日、僕はたくさん仲間たちと合流した。透明な仲間たちが集まって、押し合って、もみあって、そして、いつの間にか僕は、以前の姿を取り戻そうとしていた。ゆらり、と体が動いた瞬間、僕はあっという間に、滑り落ちるように、下の世界へ落ちていった。

落下していきながら、僕は気づいていた。

そうか、今の僕らが雲だったんだ。

いつも川の中で見上げていた、あの白い雲は、僕らの仲間だったんだ。

だから、どこか似ているような、懐かしいような気がしたんだ。

地上へ、地上へと舞い降りていきながら、僕は感じる。

また、戻っていくのだと。

いや、戻っていたところから、また出発したのだろうか。

そして、僕は思ったのだ。

僕らはこうして、どこかを流れ、漂い、落ちて、吸収され、また上り、落ちる。

ゆるやかな、一本の道を辿っているようだ。

なぜ？

どうして？

そして、どこへ行くのか　そんな疑問は解けぬまま、それでもこうして廻り続ける。

それが僕らの、流れなのだ。

あの、人間の悲しみ、苦しみ、そして喜び　それもまた、同じ

ように流れていくものの運命たぎめなのかもしれないと。

僕らも、人間も、さまよいながら、苦しみながら、流れていくのだ。

どこから来たのか、どこへ行くのか、悩みながらも、生きていくのだ。

いつから始まったのか、どこまで廻っていくのか、誰も知らないけれど。

それでも僕らは廻り、上り、また落ちて、流れる。

それが僕らの、道である限り。

僕はまた、新たな旅を始めながら、思う。

この次、雨となって、地上に降りそそぐ時、

この次、人間の喉を潤す時、

そっとささやいてあげよう。

あなたは一人じゃないんだよ、と。

僕がいるよ、と。

あなたも、僕も、同じなんだよ。

この綺麗な、悲しい世界で、ともに巡り、廻る命の仲間なんだよ、と。

そう言って、笑ってあげるんだ。

ただの水の、

ひとしずくの僕だけだ。

(後書き)

初めて企画小説に参加しました。

「水」をテーマ、ということ、思いついた「水」そのもののお話ですが、いかがでしたか？

未熟な点は多々あるかと思うのですが、書きたいテーマは表現したつもりです。。

ご感想、もちろん、辛口コメントなどお待ちしています。
よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1069d/>

水の、ひとしずく

2010年10月8日14時14分発行